



日本の国土は、亜寒帯から亜熱帯にまたがる大小の島々からなり、そこには屈曲に富んだ海岸線と起伏の多い山岳など変化に富んだ地形や各地の気候風土に育まれた多様な動植物相が見られます。

「モニタリングサイト 1000」では、このような日本列島の多様な生態系を、高山帯、森林・草原、里地、湖沼、湿原沿岸・浅海域、小島嶼に分け、あわせて 1000 か所程度のモニタリングサイトを設置しており、2003 年度より調査を実施しています。基礎的な環境情報の収集を長期にわたって継続することで、日本の自然環境の質的・量的な劣化を早期に把握し、得られた成果を保全施策や学術研究に活用することを目的としています。

森林・草原のモニタリングでは、樹木を長期的な環境変化の指標として、地表徘徊性昆虫を短期的な環境変化の指標として、鳥類を広域的な環境変化の指標として取り上げ、20 のコアサイト、28 の準コアサイト、約 420 の一般サイトで調査を行なっています。

- ・コアサイト： 毎年調査を行ない、毎木調査、落葉落枝・落下種子調査、地表徘徊性甲虫調査、鳥類調査を実施
- ・準コアサイト： 5 年に一度(一部は毎年)調査を行ない、毎木調査、鳥類調査を実施
- ・一般サイト： 5 年に一度調査を行ない、鳥類調査を実施

鳥類調査では、各サイトに 5 か所の定点を設置し、繁殖期と越冬期にそれぞれ 2 日間かけて 4 回(1 地点 1 回あたり 10 分間)、周囲に生息している鳥類の個体数調査を実施しています。

「陸生鳥類調査情報」は、結果の速報や関連情報をお知らせするために、2009 年より毎年 2 回発行しています。バックナンバーは以下よりご覧いただくことが出来ます。

<http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/index.html>

モニタリングサイト1000

陸生鳥類調査 情報

2021年 9月号 Vol. 13 No. 1



Turdus chrysolaus
Photo by Toshifumi Miki

結果速報

モニタリングサイト1000 2020年度越冬期 一般サイト結果速報 奴賀俊光・森本 元（日本野鳥の会）

全国約1,000ヶ所のモニタリングサイトのうち、森林・草原の一般サイトは約420ヶ所を占める重要な分野です。調査には、多くの市民調査員のみなさまにご協力いただいております。森林・草原の一般サイトでは、概ね5年に1度、陸生鳥類調査（繁殖期および越冬期）および植生概況調査（繁殖期のみに実施）を行っています。2020年度の越冬期は、70サイト（森林55サイト、草原15サイト）に調査をお願いしました。そのうち、調査を実施できなかったサイトなどを除き、現時点でデータが集まり集計が完了している森林50サイト、草原14サイトの計64サイトのデータを用いて、中間報告いたします。

記録された鳥類(2020年度)

合計128種（森林94種、草原92種）の鳥類が確認され、2019年度の121種より多い記録でした。また、2015年から2019年までの記録種数（103-126種）も上回り、過去6年間で最も多くの種が記録されました。しかし、調査サイト数が多く、単年度間の比較が可能な、森林サイトの記録種数について、比較すると、2020年度は2019年度（森林45サイト、97種）より調査サイトが5サイト多いにもかかわらず、3種少ないという結果でした。過去2015年から2019年までの森林サイトでの記録種数は89-97種であり、2020年度の記録種数は平年並みといえそうです。つまり草原サイトの記録を

含めた合計の種数が多かったのは、草原サイトでの記録種数が多かったためです。草原サイトはサイト数が少なく、環境も草原だけではなく、河川や湖、それらに隣接する林なども含まれるため、森林サイトよりも環境が多様で記録種数の年変動が大きくなっています。

出現率と優占度

次に、森林サイト、草原サイトにおける出現率、優占度の上位種を表1、2に示しました（出現率：ある種の出現サイト数÷調査サイト数×100、優占度：サイトでのある種の個体数÷総個体数×100を平均したもの）。現時点でのデータでは、森林サイトの出現率ではハシブトガラスが1位でした。近年、ハシブトガラスは常に上位（2位など）ではありましたが、1位となるのは2014年以来です。本種の分布の拡大縮小傾向について、今後も注意したいと思います。

森林サイトの2020年度の上位種の種構成を第3期5年間全体（2013-2017年度）の結果（表3a）と、ほぼ同じサイト構成である5年前の2015年度の上位種の種構成の結果（表3b）と比べてみます。2020年度の出現率上位種のうち、ハシブトガラス、コゲラ、ヒヨドリ、シジュウカラ、ヤマガラ、エナガ、カケス、メジロ、ウグイスの9種が、表3のどちらにも入っており、今回の結果とほぼ一致していることがわかりました。異なった点は、今回はカワラヒワ、キジバト、ミソサザイ、ルリビタキが同率でトップ10に入り、第3期全体の結果ではシロハラ、2015年度の結果ではカワラヒワ、ツグミがトップ10に入っていることです。しかし、ミソサザイ以外のこれらの種は、トップ10に出たり入ったりしている常連の種のため、2020年度の結果は概ね例年通りの結果といえるでしょう。ミソサザイについては後述します。

表 1. 2020年度越冬期の森林サイト (n = 50) の上位10位以内の種

a) 出現率			b) 優占度		
順位	種名	出現率	順位	種名	優占度
1	ハシブトガラス	94.0	1	ヒヨドリ	13.7
2	コゲラ	92.0	2	エナガ	8.8
	ヒヨドリ	92.0	3	メジロ	8.3
4	シジュウカラ	90.0	4	ヤマガラ	6.0
5	ヤマガラ	84.0		シジュウカラ	6.0
6	エナガ	76.0	6	コゲラ	5.9
7	カケス	72.0	7	ハシブトガラス	5.7
8	メジロ	62.0	8	マヒワ	3.7
9	ウグイス	44.0	9	カケス	3.0
	カワラヒワ	44.0	10	ヒガラ	2.8
	キジバト	44.0			
	ミソサザイ	44.0			
	ルリビタキ	44.0			

表 2. 2020年度越冬期の草原サイト (n = 14) の上位10位以内の種

a) 出現率			b) 優占度		
順位	種名	出現率	順位	種名	優占度
1	ツグミ	100.0	1	スズメ	12.0
2	ハシブトガラス	92.9	2	トビ	8.7
	ハシボソガラス	92.9	3	ムクドリ	8.6
	ヒヨドリ	92.9	4	ヒヨドリ	8.1
5	トビ	85.7	5	ツグミ	7.8
6	カワウ	71.4	6	カワラヒワ	7.5
	カワラヒワ	71.4	7	ホオジロ	5.2
	ホオジロ	71.4	8	カシラダカ	3.9
	モズ	71.4	9	ハシブトガラス	3.6
10	アオサギ	64.3	10	カワラハト	2.7
	スズメ	64.3			
	ノスリ	64.3			

表 3. 過去の越冬期の森林サイトにおける出現率上位10位以内の種

a) 第3期(2013-2017年度) n=236			b) 5年前(2015年度) n=48		
順位	種名	出現率	順位	種名	出現率
1	ヒヨドリ	96.2	1	ヒヨドリ	93.8
2	ハシブトガラス	89.3	2	コゲラ	93.8
3	コゲラ	87.3	3	シジュウカラ	89.6
4	シジュウカラ	86.4	4	ヤマガラ	89.6
5	ヤマガラ	79.7	5	ハシブトガラス	87.5
6	エナガ	73.2	6	エナガ	83.3
7	メジロ	63.5	7	メジロ	64.6
8	カケス	61.5	8	ツグミ	62.5
9	シロハラ	55.0	9	カワラヒワ	60.4
10	ウグイス	53.3	10	ウグイス	58.3
				カケス	58.3

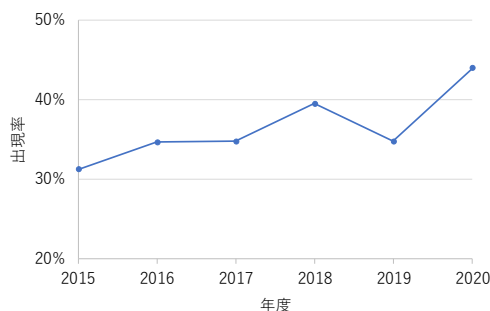


図 1. ミソサザイの出現率の年変動

ミソサザイの出現傾向

今回、出現率では同率9位でウグイス、カワラヒワ、キジバト、ミソサザイ、ルリビタキ、の5種がトップ10入りしています。このうち、ミソサザイ以外の4種は時々10位以内に入っているのですが、ミソサザイがトップ10に入ったのは初めての事です。過去6年の出現率を図1に示します。これまでは20位以内



ミソサザイ。写真：三木敏史

に入ることすらあまりなかったのに、突然トップ10入りしたのですが、出現率の変動を見ると、近年徐々に上がっていることがわかります。ミソサザイは、繁殖期は山地の湿った林や溪流沿い、崖地などに生息し、標高の高い場所で繁殖する個体は低地に移動して越冬します。林床や岩の上を移動しながら採食するので、越冬地の林床環境の変化が影響しているのかもしれませんが。林床環境の変化といえば、シカが林床植物を採食することによる藪の減少が思いつきます。シカの影響により、繁殖期のウグイスやコルリ等の藪に生息する種が減少している反面、林床が開けた結果、ミソサザイが増加したことが、宮崎県椎葉村の九州大学の準コアサイトで報告されています(本ニュースレター Vol 6 No 1)。また、ミソサザイは越冬期でもさえざることがあるため、調査時期や気候によっては、さえざりが多く聞こえ、記録数が多かったのかもしれませんが。実際、いくつかのサイトでは、さえざりで記録されています。いずれにせよ、出現率の上昇傾向が今後も続くのか、年変動の振れ幅の範囲なのか、今後のモニタリングの結果や解析を進めることで明らかになるかもしれません。

調査へのご協力ありがとうございました

今回の結果から、越冬期の森林環境に大きな変化はないことがわかりました。一方で、ミソサザイの出現率の増加傾向が確認されました。生物や環境の変化を把握できるようにするためには、毎年の調査結果の積み重ねを前提とした地道な調査が必要になります。モニタリングサイト1000が推進するこの長期調査を継続することの重要性をご理解いただければ幸いです。日本の自然環境のモニタリングの実施には、大勢の人々のご協力による調査継続が欠かせません。越冬期調査は、積雪の状況によっては繁殖期よりも何かと調査労力がかかってしまうこともあったかと思いますが、引き続き、皆様のお力添えをよろしくお願いいたします。

2020年度越冬期の一般サイト調査には、82名の皆様のご協力をいただきました。最後にお名前を記し、お礼に代えさせていただきます(敬称略、五十音順)。

東谷麻央、新井巖、池野進、石塚眞一、伊藤康史、岩切久、岩本忠義、瓜生篤、江口初男、江島浩紀、大塚之穂、大西順子、大羽康利、緒方清人、荻原千恵美、尾崎高博、小山信行、片山繁子、片山一、加藤正敏、金子博臣、川瀬浩、楠木憲一、久高将和、小泉金次、小林美博、駒田峰子、小室智幸、児山章二、齋藤修、佐藤一博、沢田宏、篠崎知明、篠原盛雄、嶋徹、嶋豊子、白石知代、菅原典子、杉山時雄、高岡奏多、高橋和也、高山裕子、竹野功璽、多田英行、田中義和、谷岡仁、田村耕作、塚原和之、津曲隆信、寺田紋子、中崎悦子、中村公義、中村栄、西村公志、西村四郎、西脇幸代、西脇淳浩、似内功孝、奴賀俊光、野田美治、端田賢二、林謙治、葉山政治、原口研治、日比野政彦、藤江昌代、藤島光俊、藤原正貴、前田和浩、松原秀幸、真野徹、村上修、室瀬秋宏、森茂晃、八木聡、柳田弘子、柳田和美、山本貴仁、吉沢雅宏、鷺田善幸、和田靖夫、渡部通

事務局からのお知らせ

● 繁殖分布調査報告会オンライン開催

本ニュースの4ページでもご報告していますが、全国鳥類繁殖分布調査がおかげさまで調査を完了することができました。そこで、報告会を開催することにしました。ご興味のある方は、お申込みの上、ご参加ください。

全国鳥類繁殖分布調査最終報告会

2021年10月24日(日) 15時00分から18時頃

Zoomを使用したオンライン開催

PC・スマホなどで、ご自宅等から簡単に参加できます

内容: 調査結果の概要・地域の状況等についてのコメント・WEB交流会

詳細・お申し込み: <https://www.bird-atlas.jp/other.html>

結果速報

2020年度 コア・準コアサイト鳥類調査 越冬期結果報告

植田陸之(バードリサーチ)

北海道の調査地は鳥少なめ

2020年度の越冬期は、16サイトで調査を行いました。毎年調査を行っている野幌は、伐採作業のために、入林することができず、調査は実施できませんでした。

越冬期は年変動が大きく、記録種数、バイオマス(記録鳥類の総体重)共に多かったり少なかったりすることがあります。雨龍と苫小牧の北海道の調査地は鳥が少なく、例年と比べてかなり低い値となりましたが、それ以外のサイトでは平年並みでした。那須高原は過去2年と比べて、かなり少ない値となっていますが、これは、アトリ類がほとんど記録されなかったためでした。

表 1. 2011~20年度越冬期コア/準コアサイトのバイオマス(kg/10ha).
2017年度の和歌山では1回しか調査を行っておらず、過小評価である

サイト名	2011	12	13	14	15	16	17	18	19	20
雨龍	0.6	1.0	5.4	2.4	0.3	1.2	2.5	2.1	0.8	0.2
野幌				29.5	24.3	16.0	26.4	12.0	11.4	*
苫小牧	22.4	23.0	23.0	27.7	17.4	15.5	29.0	19.4	5.2	5.2
青葉山				35.5	29.2	19.2	42.4	28.6	23.4	35.3
小佐渡	18.9	10.5	38.1	8.9	23.2	10.9	10.7	11.7	18.5	7.0
那須高原	12.7	3.6	4.8	2.7	7.0	3.8	3.9	11.7	20.8	1.8
小川	10.8	7.4	24.2	12.5	23.7	16.9	25.7	54.1	16.5	22.2
高原山			4.1					6.8		
筑波山			28.2					21.4		
大山沢	4.4	3.2	1.2	2.3	2.0	2.1	3.0	9.1		4.1
秩父	10.4	5.8	8.2	18.3	9.2	4.5	10.6	24.5	8.7	5.2
西丹沢			4.7					10.0		
富士	15.9			6.9					17.1	
函南					13.6					
愛知赤津	12.5	7.2	8.2	9.1	10.4	3.9	9.1	1.8	7.8	7.9
上賀茂	33.1	23.4	24.7	30.2	22.8	21.1	18.1	23.1	25.2	19.1
春日山	32.3				19.9					
和歌山	6.0	1.8	8.6	3.0	5.3	84.5	(1.3)			
半田山	1.7									
宮島				39.5					24.3	
市ノ又	4.6	2.7	2.8	8.9	6.3	11.0	7.8	9.1	5.6	15.6
佐田山		13.4					9.4			
対馬龍良山		6.3					9.5			
粕屋	15.4					6.2				
椎葉				12.4					13.7	
綾	3.9	4.3	7.0	6.2	7.3	6.4	6.9	13.5	6.5	3.7
田野	5.6	9.7	8.4	15.8	8.1	9.4	24.3	16.5	6.7	5.2
屋久島照葉樹林						20.3				
屋久島スギ林		2.7					3.6			
奄美	10.2	14.3	14.3	23.4	23.8	21.4	27.2	20.3	21.9	21.8
与那	23.3	20.0	21.9	22.5	29.2	22.6	27.8	20.4	16.8	20.0
西表					21.8					6.6
小笠原石門	3.3					6.5	6.5			

少なかった秩父のヒガラ

私が調査したサイトで、今年目立ったのがヒガラの少なさです。秩父の2サイト(秩父、大山沢)で、ほとんどヒガラが記録されなかったのです。

越冬期の記録数は、調査中に混群と出会うかどうかで大きく変わってしまいます。ただ、一緒に混群になるヤマガラやコガラと比べ、ヒガラの年変動はかなり大きく(図1)、最も少なかった年と多かった年は1羽から24羽まで変動しました(変動係数 0.63)。それに対して、ヤマガラ(0.38)、コガ

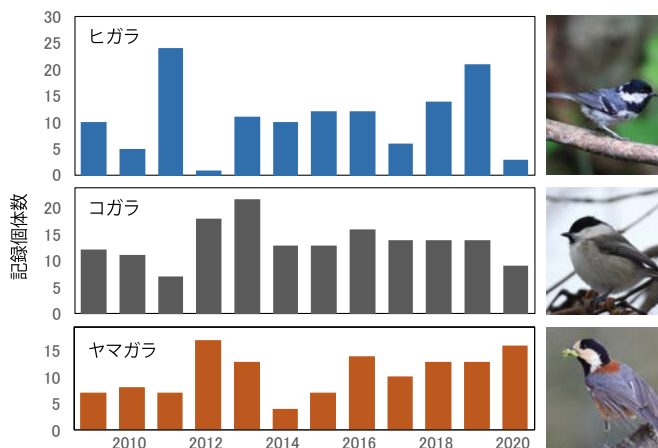


図 1. 秩父演習林のヒガラ、コガラ、ヤマガラの記録個体数の年変動。
写真: 三木敏史

ラ(0.32)は半分程度でした。なぜヒガラはほかのカラ類と比べて大きく変動するのでしょうか？

おそらくヒガラが冬に秩父から低地に移動するためではないかと思います。ヒガラの数が最も少なかった2012年は、平地の緑地で珍しくヒガラがたくさん見られた年でした。そして、2020年の冬も、低地でこそ見られなかったものの、普段ヒガラがいない丘陵地でヒガラが見られました。

では、なぜヒガラは移動するのでしょうか。ヒガラは雪の積もった針葉樹で観察できたりするので、冬には強そうに思え、温暖な場所に生息するヤマガラの方が移動しように思えます。これらの3種は採食場所が異なり、ヒガラが枝先中心なのに対して、コガラやヤマガラは地面や低い場所をよく利用します。積雪の影響は低い場所を使うコガラやヤマガラの方が強く受けるでしょうから、採食場所の違いでは説明できそうもありません。ヒガラだけが異なる習性には、貯食があります。ヤマガラやコガラが、秋に木の実を蓄えるのに対し、ヒガラはそういう行動をとりません。もしかすると、貯食をしないがゆえに、食物条件の悪い年はその影響をほかの2種よりも強く受け、移動せざるを得ないのかもしれない。

こうした、冬期にヒガラが少ない年があると、その後の繁殖期にどうなるかも気になります。冬に少なかった2012年の後は、しばらく繁殖期のヒガラのさえずりが少ない印象がありました。2020年の春も、例年ならさえずりが活発な3月になってもヒガラの声がせず、ヒガラが減ってしまうことを心配していたのですが、4月に入るとほぼ例年通りの状況に戻りました。こうした季節移動が繁殖期の個体数に及ぼす影響の有無についても注意して記録していきたいと思います。

調査へのご協力ありがとうございました

2020年の現地調査にあたっては、岩本富雄、植田陸之、上原一郎、尾崎佑実、川崎慎二、金城孝則、庄山 守、善浪めぐみ、高美喜男、瀧本宏昭、中村 聡、中村 豊、濱田哲暁、平野敏明、外間 聡、柳田和美、梁瀬桐子(敬称略)ほか多くの方々のご協力をいただきました。皆様に感謝いたします。

事務局からのお知らせ

全国鳥類繁殖分布調査 全コースの調査が完了

植田睦之(全国鳥類繁殖分布調査事務局)

2,344地点の全国鳥類繁殖分布調査の現地調査がついに完了しました。2014年から準備を開始し、予定していた全てのコースを調査することができました。8割の調査地でデータがとることができれば大成功だと思っはじめた調査が、全コース完了までたどりつけたのは、参加いただいた2,090人の皆様のおかげです。ありがとうございました。



図1 全国の調査地の分布。全国に調査地が均等配置されている。

南北での種数の違い

全国鳥類繁殖分布調査は、全国を20kmメッシュで区切り、その中に2コースを配置して調査しています。全国に調査コースが均等配置されていますので(図1)、この結果をみることで、日本全国の鳥の分布状況を知ることができます。

南北方向に緯度2度ごとに区切って、その種数等を示したのが、図2です。種数は北に行くほど多くなる傾向にあるのがわかります。5-6月にバードリサーチが実施した各自が2週間に観察した種数を競うイベント「インターネット・バードソン」では北海道や東北の人が確認種数上位を占めました。その結果もうなづけますね。

南で種数が少ないのは、南に位置する小笠原や南西諸島などの島で、鳥の生息種数が少ない「島の効果」があるためです。一方、九州以北でもやはり北に行くほど種数が増えています。その理由の1つに、南方にある照葉樹林よりも、北方にある落葉樹林の方が利用する鳥の種が多様であることがあげられます。春に葉がなく、林床まで陽が差し込むので、落葉樹林は林床植物や、低木なども茂っていて、森の中の階層構造が発達しています。そして、それぞれの階層を利用する、いろいろな鳥が住むことができます。春の展葉とともに、イモムシなどが増えて、繁殖期に食物が増えることも関係していると思います。また、

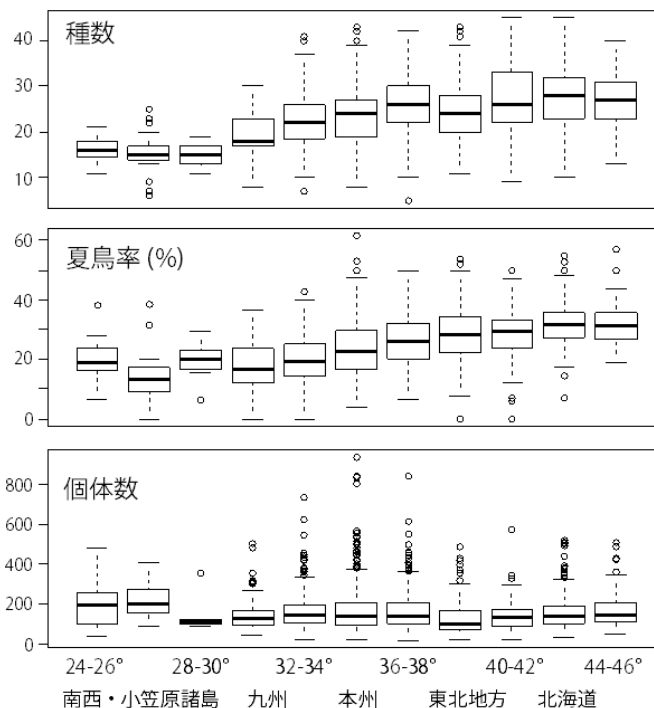


図2 日本の南北方向での各調査地の種数、夏鳥率、個体数の違い。横軸は緯度方向に2度ごとに区切り、グラフの口は、データの25-75%の範囲、口の中の横線は中央値を示す。棒は外れ値を除いたデータの範囲を示し、○は外れ値を示す。

北に行くほど夏鳥率が高いことからわかるように、北に夏鳥が多いことも種数が多い理由です。冬の厳しい北の地域は、冬を越せる留鳥の個体数が少なく、留鳥との競争が少なく、夏鳥が生息しやすいのかもしれませんが。

個体数については、種数や夏鳥率のような明確な傾向がありませんでした。種数が少なかった南の南西諸島の方が、個体数が多いほどでした。南では冬が温暖で、留鳥の死亡率が低くて個体数が多いことなどで、種数のような傾向がなくなっているのでしょうか？

地域で異なる優占種

種数だけでなく、優占種も南北で大きく異なっていました。記録地点数(分布の広さ)と個体数(数の多さ)の2つの面から優占種を示すと、本州・四国・九州の優占種は、分布の広さでいえばウグイスやヒヨドリ、数の多さでいえば、それにスズメが加わってきます(表1)。それに対して北海道はウグイスは共通ですが、アオジ、キジバトそしてセンダイムシクイが上位に来るなど異なるのです。アオジは本州の繁殖個体は減少していて、今回記録できなくなってしまった場所も多かったのですが、北海道では今も昔も最優占種です。そして、前節で説明した北の夏鳥率の高さも関係するのか、センダイムシクイに加え、ツツドリ、そして、キビタキと夏鳥の優占種が多いのも特徴です。

南西諸島の優占種も本州などと異なり、セッカやリュウキュウツバメ、インヒヨドリと特徴的な鳥が入ります。そして、東日本(中部以北)と西日本(近畿以西)では、大きな違い



図 3 全国的に多いウグイスとヒヨドリ、北海道を特徴づけるアオジとセンダイムシクイ、南西諸島に多いセッカ(写真:三木敏史)

表 1 地域別の記録地点数, 総個体数上位10種. カッコ内の数字は調査地数

北海道(486) 記録地点数		東日本(1,023)		西日本(760)		南西諸島(75)	
アオジ	460	ウグイス	949	ヒヨドリ	720	ヒヨドリ	73
キジバト	458	ヒヨドリ	934	ウグイス	715	メジロ	71
ウグイス	445	シジュウカラ	883	ハシブトガラス	629	ハシブトガラス	69
ツツドリ	440	キジバト	860	シジュウカラ	623	キジバト	68
センダイムシクイ	417	ホオジロ	837	ホオジロ	618	セッカ	58
キビタキ	406	ハシブトガラス	807	ヤマガラ	608	アカショウビン	58
シジュウカラ	379	キビタキ	768	カワラヒワ	559	スズメ	52
ハシブトガラス	378	ヤマガラ	664	コゲラ	556	リュウキュウツバメ	50
アオバト	358	コゲラ	662	キジバト	542	サンコウチョウ	48
カワラヒワ	348	カワラヒワ	646	メジロ	541	イソヒヨドリ	48
総個体数							
ウグイス	6,257	ヒヨドリ	18,024	ヒヨドリ	16,548	ヒヨドリ	2,635
センダイムシクイ	6,140	スズメ	12,229	ウグイス	10,693	ハシブトガラス	1,606
アオジ	5,353	ウグイス	10,755	スズメ	8,750	メジロ	1,430
キジバト	3,723	ホオジロ	6,462	ハシブトガラス	5,375	キジバト	1,077
キビタキ	3,217	シジュウカラ	6,246	メジロ	5,145	スズメ	934
ハシブトガラス	2,457	ムクドリ	5,742	ホオジロ	5,047	セッカ	838
カワラヒワ	2,433	ツバメ	5,195	ツバメ	4,900	シロガシラ	821
ヒヨドリ	2,353	ハシブトガラス	5,192	カワラヒワ	4,738	ウグイス	809
ツツドリ	2,220	カワラヒワ	4,954	ヤマガラ	4,601	リュウキュウツバメ	428
ハシボソガラス	1,886	キジバト	4,896	シジュウカラ	4,109	イソヒヨドリ	409

表 2 関東地方から近畿地方における標高別の記録地点数上位10種. オレンジは開けた場所に生息する種

0-100m (267)		100-250m (131)		250-500m (169)		500-1000m (169)		1000-1500m (63)		1500m以上 (33)	
スズメ	253	ヒヨドリ	130	ヒヨドリ	149	ヒヨドリ	163	ヒガラ	61	ウグイス	30
ヒヨドリ	253	ウグイス	127	ウグイス	142	ウグイス	159	ウグイス	57	ヒガラ	28
ツバメ	247	ホオジロ	117	シジュウカラ	141	シジュウカラ	156	キビタキ	57	メボソムシクイ	28
ハシボソガラス	245	シジュウカラ	116	キビタキ	130	ヤマガラ	153	シジュウカラ	56	ミソサザイ	26
ハシブトガラス	239	ハシブトガラス	114	ホオジロ	129	オオルリ	149	オオルリ	54	ルリビタキ	25
キジバト	235	メジロ	111	キジバト	128	キビタキ	148	カケス	53	コガラ	22
カワラヒワ	226	ヤマガラ	109	ヤマガラ	126	ホオジロ	143	ホオジロ	47	ホトギス	22
ウグイス	211	キジバト	106	ハシブトガラス	119	コゲラ	136	ミソサザイ	46	カケス	21
ホオジロ	199	カワラヒワ	105	メジロ	116	カケス	136	コガラ	46	カッコウ	21
カルガモ	192	キビタキ	104	オオルリ	116	ヒガラ	134	ヒヨドリ	45	キセキレイ	19

はありませんが、照葉樹林に多いヤマガラやメジロが西日本で上位に来る点やや異なっていました。

標高でも異なる優占種

優占種は南と北で異なりますが、標高によっても変わってきます。標高分布は、気温や植生が影響して、同じ種でも北ではより低い標高でも分布するようになど、南と北でも違

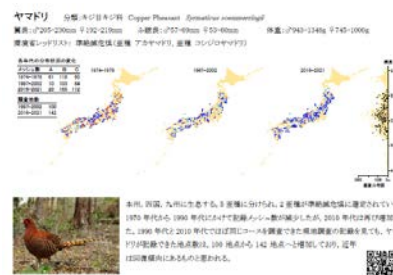
うので、関東地方、中部地方、近畿地方のデータから標高による優占種の違いを示しました(表2)。標高100m以下は市街地や農地が多くを占めているためか、スズメ、ツバメなど開けた場所に生息する種が多いのに対し、それより高くなると、山や丘陵帯となり、樹木が多くなってくるので、樹林性の鳥が多くなること。そして、樹林性の鳥も、ヒヨドリやシジュウカラやヤマガラから、ヒガラ、コガラ、そしてメボソムシクイやルリビタキなどへと変わっていくことがわ

かります。そんななかでウグイスだけは、0-100mでは8位とやや順位が低いものの、それ以外の標高では1位もしくは2位と、水平、垂直問わず、日本の最優占種であることが、わかりました。

取りまとめた結果を秋に公開予定

現在、鳥類繁殖分布調査会にて、こうした情報や全種の分布図を掲載した「全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021年」を作成中で、10月には完

成できると思います。現地調査にご協力いただいた方には、冊子版をお送りする予定です。また、調査への参加不参加を問わず、どなたでもダウンロードできるPDF版も公開する予定です。発行されましたら、このニュースレターでお知らせしますので、お楽しみに。

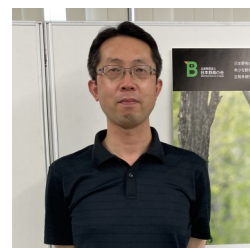


担当者紹介

日本野鳥の会の担当に奴賀が加わりました。

奴賀俊光 はじめまして、ではない方も多いかもしれません。日本野鳥の会の奴賀(ぬか)俊光と申します。以前は、バードリサーチでモニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査の事務局をしていました。その後、横浜自然観察の森レンジャーを経て、4月から当会の自然保護室勤務になりました。もともとミユビシギやコアジサシなど海辺の鳥を観察したり、モニタリングサイト1000のシギチ調査員もしています

が、野鳥全般的に好きなので、北海道から沖縄まで、高山、森林、草原の鳥もよく見に行きます。一般サイト担当のみなさまとは、すでにメール等でいろいろやり取りをさせていただいておりますが、今後ともよろしくお願いいたします。



事務局からのお知らせ

モニタリングサイト1000陸生鳥類調査 研修・交流会（オンライン）のご案内 12月12日(日)

モニタリングサイト1000の長期的な調査を継続するためには、調査員の皆様の継続的なご協力が欠かせません。今年度も新たな調査員の方や現役の調査員の方との交流、調査方法の研修を兼ねた研修・交流会を実施したいと思います。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、昨年同様に現地での開催は見送り、オンライン(オンライン会議システムZoomを使用)での開催をしたいと思います。パソコン等とネット環境があれば、全国どこからでも参加することができますので、ぜひご参加ください。詳細はHPやメールでお知らせします。参加登録の際にはメールの登録をお願いいたします。なお、昨年の研修会の様子はウェブサイト(<https://www.youtube.com/watch?v=dLVIAjJEm8>)でも公開していますので、ぜひご覧ください。

モニタリングサイト1000 調査研修会

【主催】日本野鳥の会・バードリサーチ

【開催日時】2021年12月12日(日) 13:00-16:00

【詳細HP】<http://www.bird-research.jp/1/moni1000/>

【内容】

- ・モニタリングサイト1000事業の概要と成果
- ・モニタリングサイト1000の調査の方法
- ・模擬調査実習
- ・意見交換

【お問い合わせ先】

日本野鳥の会 モニタリングサイト1000担当
〒141-0031 品川区西五反田3-9-23丸和ビル
Tel: 03-5436-2633(13-15時) Fax: 03-5436-2635
Mail: moni@wbsj.org